

神戸大学で 国際保健を学びたい方へのご案内

2つの研究科での研究指導

私は2012年4月に神戸大学に保健学研究科国際保健学領域国際開発分野の教授として採用されました。前任者の中園直樹教授が国際協力研究科保健医療論講座を協力講座として兼任していたため、それを引き継ぐ形になり、2つの研究科の教授を兼任しています。

どちらの研究科の学生も、海外でフィールドワークをしたいという希望をもって入学してくるケースが大半なのですが、COVID-19のパンデミックが起ってから、海外渡航ができず、在日外国人の研究にテーマを変えたり、DHSなどの二次資料の統計解析や、システムティックレビューとメタアナリシスといった手法にアプローチを変えたり、海外の共同研究者を通じてアシスタントを雇用して現地調査を代行してもらおうといった手段で取り組まざるを得ませんでした。2022年10月から、漸く海外渡航を再開でき、カンボジア、ネパール、ミクロネシア連邦などに滞在する学生が出てきました。学振DCや、神戸大学が最近開始した博士課程の大学院生向けの奨学金と研究助成金制度を活用して、申請書の指導や推薦状を出すなどサポートはしま



パプアニューギニアの村での聞き取り調査



神戸大学大学院保健学研究科(国際協力研究科兼任) 教授

中澤 港

東京大学医学部保健学科卒。博士(保健学)。2012年から現職。アジア・オセアニア地域で人類生態学の視点から包括的なフィールドワークを展開してきた。

すが、大学院生自身が自力で研究資金を得ています。自分自身の研究としては、人口学や理論疫学もやっているのですが、そういう研究をしたい院生も指導できるのですが、残念ながらこれまで10年間、1人もいませんでした。

保健学研究科パブリック ヘルス領域国際保健学分野 と国際感染症対策分野

現在の所属は、保健学研究科では、国際保健学領域が地域保健学領域と合併するという組織改革によってパブリックヘルス領域となり、以前の国際開発分野と国際保健協力活動分野が合併して国際保健学分野という大講座になっています。国際保健学分野では、自分の他には、2022年度に長崎大学から異動され、医師でもある松井三明教授、保健師でもある小寺さやか准教授、理学療法士でもある井澤和久准教授が院生を受け入れ可能です。

同領域には国際感染症対策分野も設置されており、ウイルス学の亀岡正典教授、寄生虫学の入子英幸准教授、細菌学担当で泌尿器科の医師でもある重村克巳准教授が所属しています。デングウイルス、HIV、マラリア原虫、淋菌などのラボでの研究もされていますが、インドネシアのアイランガ大学に設置している神戸

大学拠点に長期滞在して研究を進める院生もいます。この2つの分野は合同で、毎月1回の院生中間発表会を行っていて、原則として英語で発表を行っています。ICHSという英語だけで全単位を取得できるコースが設置されており、ネパールやラオスなど海外からの留学生も在籍しているため、質疑応答も英語で行うことが推奨されていますが、複雑な論点については日本語での発言を教員が英訳することもあります。博士論文は学術誌にピアレビューを通った英語論文として公開されることが提出条件になっています。長期履修制度があり(理由とともに予め就学期間を延長申請し、相応と認められれば、修士課程では2年、博士課程では3年分の学費総額を増やすことなく2倍までの在学期間が認められます)、夜間や土曜日の講義もあるので、仕事をしながら少しずつ単位を取ると同時に研究を進める社会人院生も少なくありません。

国際協力研究科地域協力 政策専攻保健医療論講座

国際協力研究科の保健医療論講座には、着任当初は医学研究科の川端真人教授が所属していましたが、現在は自分と亀岡教授が所属しています。保健医療論講座は地域協力政策専攻に属しており、同専攻に所属する開発経済学者である島村靖



① マヒドン大学Tawee先生と研究室ミーティングでの記念写真
 ② カンボジアでの研究打ち合わせ
 ③ ソロモン諸島の村での尿検査



治教授とは、主に東南アジア諸国でさまざまな共同研究をしていて、大学院生が参加することもあります。国際協力研究科には秋入学の英語コース（開発政策特別コース）があり、アジア開発銀行などの奨学金を受給して入学する留学生も多いです（保健医療論講座でもいました）。4月入学の日本語コースでも、保健医療論講座では修士では国際学、博士では学術の学位取得が求められるため、英語科目の単位取得が必須となっています。また、海外でのインターンシップや留学の機会は多くあります。どちらの研究科も海外でのフィールドワーク自体、単位化されています。

主に英語による多様な講義

講義に関しては、私は Demography、Medical Anthropology、Epidemiology、Environmental Health を英語で講義している他、Global Public Health の講義と演習を通年で毎週2コマ実施していま

す。Medical Anthropology や Environmental Health には留学生も含め多くの研究科からの参加があるので、ディベートなどを通して貴重な学びが得られたという声を聞いています。さらに、保健学研究共通特講Ⅳ・Ⅷとして、保健学分野の研究計画の建て方やデータ解析方法についての講義を日本語で実施しています。学部生向けに開講している、国際情報検索という科目は、文献検索の方法や文献管理ソフトの活用法を教授してシステムティック・レビューやメタアナリシスをして貰うものなので、それを聴講することもできます。いずれも講義資料はウェブ上で公開しています。もちろん、他の教員の担当科目、例えば、保健学研究科の感染症学特講やサイエンティフィック・イングリッシュ特講、国際協力研究科では社会調査の方法論や経済、法律等の専門科目を学ぶこともできます。

保健学研究科の院生は管理栄養士や看護師など専門職資格をもっている人が多

いので、修了後も前職に戻る方が多い一方、国際協力研究科では修了後に一般就職する方が多いという印象があります。中には大学教員になる人や国際協力の実務に携わる人もいます。幅広い視点から国際保健に関心をもつ学生を歓迎します。留学生もいますので、出身国での経験や保健医療事情、文化的背景を共有してもらったり、逆に日本の事情を伝えたりといった、多面的な交流をすることもできます。講義や研究発表、教室会議はすべて英語で行っています。

日本でも世界でも、博士を取得した研究者が求められています。世界をよりよくしたい、世界中の人々がより健康に過ごせる一助となる仕事をしていきたい、途上国で国際看護を実践したい方は、ぜひ研究室のホームページをご覧ください。世界の人々の健康をよりよくしたいという想いを持った仲間が増えることを祈念しています。